

## チーフ報告 白金校舎学生スタッフ活動報告

2009年度の白金学生スタッフは、周りとの“縁”や“つながりの深さ”を感じた1年だった。それは、前年度の活動と比較することで明確に整理することができる。

2008年度は、白金学生スタッフにとって変化の年であった。私が入学した2007年度は、「学生スタッフって何をしているの」と聞かれても答えることができない、そんな状況だった。そこで、「学生スタッフの役割とは何か」という問いを、改めてみんなで考えた。その結果、「人と人の架け橋」になること、これが学生スタッフの役割であるとの意見にまとまり、それを目指して、2008年度、学生スタッフの活動がスタートした。その後、様々なプロジェクトが立ちあがった。学生だけで行うものから、外部の方との協働によって行われるプロジェクトまで、内容も環境に特化した活動や地域での活動、フリーペーパー製作など多岐に渡った。このように数多くのプロジェクトを抱え、2008年度はそれを軌道に乗せることで精一杯だった。新メンバーの獲得や活動の周知活動、イベント開催など、何もかもがはじめてでただただ、がむしゃらに活動を行っていたように思う。

しかし、2009年度は活動の基盤ができたことにより、活動を進化させると共に、がむしゃらになりすぎていて見えていなかったものが見えるようになった気がする。それは、人と人との「つながり」である。私たち白金学生スタッフは気づいていなかったが、がむしゃらに活動を重ねていたことでいつの間にかプロジェクトを一緒に盛り上げてくださっている外部団体の方々との間に、信頼関係が生まれ、そのつながりは深いものになっていた。私たちがそれを実感したのは、11月10日に行われた明治学院大学ボランティアセンターリニューアルイベント「白金合コン」の時だった。いつもお世話になっている外部団体の方、地域の方など、大勢の方々に「ボラセンリニューアルイベント“白金合コン”を開催するので、ぜひいらっしやいませんか」とお声掛けしたところ、急なお誘いにも関わらず、60名の方が参加してくださった。日頃の地道な活動がこのようなつながりを生み、さらには横のつながりを作る、よい機会を生んだのだと感じた。学生スタッフのミッションである、「人と人の架け橋となる」ということを実践できていると感じた。

“つながりの深さ”を感じたのは、外部の方に限ったことではなかった。学生同士のつながりも今年1年で深くなったと思う。私たち学生スタッフは春に新スタッフの募集を行わなかった。それは、学生スタッフの活動に参加してもらい、直に学生スタッフの活動について理解した上で仲間になってほしいという願いがあったからだ。初めての試みでもあり不安もあったが、結果的には多くの学生が新スタッフとして登録してくれた。さらには、横浜校舎に4年間在籍する国際学部の学生までもが、白金学生スタッフの活動に興味を持ち、新スタッフとして登録し、本格的に白金学生スタッフの活動に参加している。彼らがスタッフになったきっかけは、特定のプロジェクトに興味があっただけかもしれない。しかし、今ではそのプロジェクトだけでなく、その他の学生スタッフの活動にも積極的に参加してくれるようになった。特に夏の研修会合宿、白金合コンを通して、学生スタッフ間に団結力が生まれ、辛い

ときも楽しいときも、その時間を共有できる仲間となった。大変な時、声をかけ、応援してくれ、そして助けてくれる仲間がいる、それはとても素晴らしいことだ。私は学生スタッフの活動を通して、そんな仲間をたくさん得ることができた。いつも大変な時、悩んでいる時、助けてくれる仲間ができたことに、とても感謝している。ぜひ、今後も学生スタッフのつながりを深め、楽しいときや辛いとき、それを分かちあえる仲間であり続けたいと思う。

#### 【今後の展望】

学生スタッフの新メンバーの獲得は、今後も活動を重ねていく上では必要不可欠である。来年度から、心理学部の新入生も戸塚校舎在籍になってしまうため、白金校舎には1、2年生がいなくなってしまう。サークル活動は、1、2年生が主体で動いているため死活問題だ。今後、学生スタッフの魅力を発信しつつ、新メンバーの獲得に努めたい。

学生スタッフの魅力とは、何だろうか。私は自分の興味のあることに自分のペースで活動に参加できることであると考えている。大学生は学業もあるし、アルバイトもあるし、もちろん遊ぶことも含めて学生生活を楽しみたい。私の場合は何か新しいことの1つとして、自分のためにも人のためにもなることをしたいという思いから、ボランティアセンターに飛び込んだ。そして、学生生活を充実したものにし、様々なことを経験したくて、学生スタッフとして活動している。しかし、学生スタッフの活動にすべての時間を費やしているわけではない。自分のペースで、自分の関わられる形で活動に参加している。私の場合は、授業の合間にボランティアに行ったり、フリーペーパーを製作したりと時間を上手く使って活動している。学生スタッフとしての責任は必要であると思うが、活動は義務ではない。したがって、自分の空いた時間に白金地域に出向いていってちょっとした地域活動ができる、というのが学生スタッフの魅力であるとする。この魅力を学生に伝え、新メンバーの獲得につながればいいと思う。

2008年2月に白金学生スタッフのチーフを引き継ぎ、現在に至るが、私はチーフとして何をしてきただろうか。現在の白金学生スタッフの活動は、各プロジェクトの活動と学生スタッフ全体で行う研修会・合コンと大きく分けて2つ活動からなっている。チーフの役割は、各プロジェクトの活動も含め、学生スタッフ全体のことを見渡すことである。だから、私なりに様々なプロジェクトの様子を積極的に各プロジェクトのメンバーやコーディネーターである李さんに聞いたりして、学生スタッフ全体を見渡そうと努力してきた。そうした努力が、学年学科違うスタッフメンバーとコミュニケーションを取るいい機会にもつながったし、コミュニケーションが取れたおかげで、私自身が困った時には、逆に助けってもらうことができた。チーフは、決して偉いわけでもなく、全てを抱える必要もない。全員で楽しいことも苦しいことも共有する、そんな仲間がいたからこそ、1年間チーフとして活動できたのだと思う。何でも言い合える、また助け合える環境を学生スタッフ全員で作れたことを活動の中で実感した。今後も学生スタッフとして、仲間とともに切磋琢磨しながら、成長していきたい。

(白金校舎学生スタッフ チーフ 心理学部心理学科3年 須賀ゆきの)

## 白金志田町倶楽部学生チーム

### 【はじめに】

明治学院大学がある白金で明治学院大学の学生だからこそできる活動を行いたいと思った学生有志が集まって、2008年4月から白金志田町倶楽部（以下、志田町倶楽部）の活動に参加し、2008年6月25日、正式に白金志田町倶楽部学生チーム（以下、学生チーム）が発足した。白金地域と、白金の街に住む人、働きに来ている人、そして出会うすべての人との縁とつながりを大事に活動していきたいと考えている。また“明学のつながり”ということで、校地（白金・戸塚）に関係なく、明治学院大学の6学部全ての学生と教職員を巻き込んで活動している。このように明学の輪、地域の輪を広げていくために、様々な活動を通して、地域の人と共に活動を盛り上げている。

### 【活動報告】

2009年、私たちは主に、志田町倶楽部が白金地域で開催しているイベント（シロカネグローバルフェスタ2009・白金とブルキナファソをつなぐテレビ会議など）から日常的に行われる活動（防犯パトロール・JAZZコンサートなど）に学生の立場で関わってきた。以下、主な活動を具体的に説明していく。

#### ●シロカネグローバルフェスタ2009

2009年5月15日（金）、16日（土）に白金地域で行われたシロカネグローバルフェスタ2009には、



50名を超える明学生が、事前準備から当日の運営にまで関わらせていただいた。また、今回のフェスタでは、白金ボランティアセンター学生スタッフ（以下、学生スタッフ）のプロジェクトの1つである“MGパール”（詳しくは22～23ページ参照）と学生スタッフの有志による“たこ焼き屋（詳しくは35ページ参照）”、そして横浜校舎を活動の拠点とする“ぼけっと”（カンボジアの子供

たちの教育支援を行っている団体）という3つの団体で「piece of 明学」としてブース出店した。活動を通して明学生が地域に飛び込んでいくよいきっかけの1つになったのと同時に、「明学生ってこんなこともやっているんだ」ということを地域の方々にアピールするよい機会となった。また、このフェスタを通し、学部の違う、学年の違う学生が出会い、一緒に作業することによって参加した学生たちは互いに冗談を言えるまでに仲良くなることができた。結果、学生チームのメンバーの獲得につながり、フェスタ以後も学生チームメンバーとして活動に参加してくれている。



また、志田町倶楽部の方との距離も縮まったと思う。青い志田町ジャンパーを着て、白金の街を歩き、志田町倶楽部および地域の方から「お疲れ様」という温かい声をかけていただいた。このことが、私たちと志田町倶楽部また地域の方との距離の近さを実感することができた。このようにフェスタが繋いで

くれた明学生の輪と志田町倶楽部の方々との繋がりを大切にしながら、今後の活動に励んでいきたい。そして、2010年のフェスタでは、企画の段階から関わり、志田町倶楽部の方々とは協力しながら、明学生ならではの活動を積極的に行っていきたいと考えている。

#### ●防犯防火パトロール

月に2回、白金地域の安全のために行われている防犯パトロールにも、参加させていただいている。



拍子木を叩いたりするなど、なかなか経験できないことも楽しませていただいている。また、志田町倶楽部の方々とお話しながら、白金の街を歩くことによって、オシャレなイメージのある白金だけではなく、地域に昔ながらの建物や根差した町工場が広がっている違った白金の一面を見ることができた。実際に地域活動に参加することでしか気づけなかったことである。こ

ういった日常の地道な活動の蓄積が大きな力と信頼につながっている。今後も、こういった地道な活動を大切にしていきたい。

#### 【今後の目標】

1つ目は、学生チーム内での連携を上手く取っていくことである。3月に学内での連携を取るために“寄り合い会”という名称で、学内での連携を取るために学生チームと教職員が集まる機会を作ったがなかなか会を開くことができず、せっかくの会を活かしきれなかった。今後は、定期的に会を開き、学内での連携を図ると同時に、白金・横浜両キャンパスにメンバーがいるという学生チームの利点を活かし、多くの学生を巻き込み、志田町倶楽部の方々と共に白金地域を盛り上げていきたいと考えている。

2つ目は、「明治学院大学の学生だからこそできる活動を行いたい」というモットーのもと、学生提案の企画を志田町倶楽部の方で行うことである。現在までの学生チームの活動を振り返ってみると、協働といえども、もともとあった志田町倶楽部の活動に参加することが主だった。志田町倶楽部の活動に参加させてもらって3年目となる2010年は、これまで培ってきた信頼関係を生かし、明学生だからこそできる、明学生にしかできない地域活動を志田町倶楽部の方々で行えるよう企画を煮詰めていきたい。そして、私たち学生チームが地域と学生とをつなぐ架け橋となれたらと思う。

ちょうど1年半前、志田町倶楽部の活動に参加させてもらったことが、私自身を変えるきっかけとなった。それまで、学生スタッフとして何をしていけばいいのか分からず、右往左往していた私を先輩が志田町倶楽部の活動に連れて行ってくれたのが始まりだった。そこで多くの人と出会い、良い刺激を受けた。「まずは何か一歩踏み出してみること」の大切さを学んだような気がする。そして志田町倶楽部には魅力的な方がたくさんおり、まだまだ学ぶことは多くある。今後も志田町倶楽部との活動に参加しながら、多くのことを学び、自分自身成長できるよう頑張りたい。

(心理学部心理学科3年 須賀ゆきの)

## パールビーズの森プロジェクト 学生チーム「MG パール」

### 【団体説明】

私たち MG パールは、ボルネオ島を活動場所として森林伐採やアブラヤシのプランテーション開発のため棲み処を追われている野生生物を保全するため活動している NPO 法人ボルネオ保全トラストジャパン（以下、BCT ジャパン）と、明治学院大学ボランティアセンターの三者協働で、「パールビーズの森プロジェクト」を実施しています（プロジェクトの詳細は 2008 年度報告書を参照）。このプロジェクトは白金・横浜の両校舎で展開していて、地域のお祭りや学内でのイベントでの販売活動を通してボルネオ島と私たちの生活が密接に関わっていることを多くの人に知ってもらうことを目的としています。

### 【活動報告】

今年度は両校舎でメンバーを集めること、活動を知ってもらうことが活動の中心になりました。具体的には白金校舎では地域や生協前での販売活動を通じて啓蒙活動を行い、横浜校舎では今年から活動を始めたためアクセサリー作りを通じて学生を呼び込みました。

また、白金校舎では BCT ジャパン理事長の坪内俊憲さんを、横浜校舎では BCT ジャパン理事で多摩動物公園の飼育員の黒鳥英俊さんをお招きして講演会も行いました。

5月16日に白金高輪の路上で大規模なお祭りが行われたシロカネ・グローバル・フェスタ 2009 では、「piece of 明学」として地域の方にこのプロジェクトを知ってもらうことを目的として出店しました。出店で販売を行うのは初の試みでしたが、地域の方から声をかけてもらうことができる貴重な機会になりました。また、あまり交流のない両校舎のメンバーとのつながりもでき、人と出会い、つながる実感の伴ったイベントでした。

そして両校舎のメンバー同士の交流として BCT ジャパンの事務所訪問や多摩動物園オランウータンツアーを企画したことで、メンバー間だけでなく BCT ジャパンとの関係作りにもつながりました。

12月6日に白金校舎のパレットゾーン2階で開催したジャングルクリスマスフェスタ in 白金 2009 は、学内外の方々と交流することで地域とのつながりを深め、私たちの身近にある環境問題にも関心をもってもらいたいという思いで企画しました。

イベント当日は一人ひとりのお客さんにプロジェクトの趣旨を説明し、理解してもらうことができました。また毎日新聞や読売新聞などに取り上げていただいたことで大学周辺の地域にとどまらず、より広範囲での広報につながり、知名度も向上しました。

また、このほかにも認知度を上げるための工夫として「ボランティアファンドチャレンジ賞」にも応募・受賞しました（詳細は本書 67～68 ページ参照）。

販売では、ピアス、ストラップ、プレスレット、チャームを製作し、年間で 83 個の売り上げにつながりました。これで 415m<sup>2</sup>分の森を守るための資金になりました。

実施時期などにつきましては、「表 1. MG パール 2009 年度年間スケジュール」をご参照ください。

表1. MG パール 2009 年度年間スケジュール

		【白金】	【横浜】
【春学期】	白金：木曜2限～昼	パールアクセサリ－講習会	
	横浜：水曜昼～3限		
	4月6日	パール★ナイト	
	5月16日	シロカネ・グローバル・フェスタ 2009	
	6月3日		ハマ de パール
	6月11.18.25日	「生協まえのパール屋さん。」	
	7月16日	ボルネオ保全トラストジャパン事務所訪問	
	9月14日	多摩動物園オランウータンツアー	
【秋学期】	白金：火曜昼～3限	パールアクセサリ－講習会	
	横浜：月曜昼		
	10月19日		「横浜生協のパール屋さん」
	12月6日	ジャングルクリスマスフェスタ in 白金 2009	

#### 【成果・反省】

今年度は横浜校舎のメンバーが増えたことで両校地での活動が可能となり、活動に参加する学生の幅が広がりました。昨年よりできる活動も増え、学内外での知名度の向上にもつながりました。アクセサリ－に対しても製作意欲が高まり、より質の高いアクセサリ－製作へのステップを踏むことができたように感じます。しかし、メンバーが増えたことでコミュニケーションが不足し、情報の報告・連絡・相談（ホウレンソウ）を徹底することができず、全員が平等にプロジェクトに関われませんでした。これらを改善するために学生同士の信頼関係の形成にも力を入れたいと感じました。

#### 【今後の方針】

来年度は活動に参加しているメンバー全員と情報を共有する工夫をしていきたいと考えています。特に2校地で活動しているため、両校地のメンバーが定期的にコミュニケーションをとる機会を増やしていきたいです。また、学内に向けた講習会も増やすことで、学生や教職員に対してもっとプロジェクトを知ってもらいたいと考えています。

しかし、活動するにあたってボルネオの現状を伝えるのに勉強会や講演会だけでは限界があると感じているため、実際にメンバーでボルネオ島に行って、現地の様子を自分の目で見ることのできる機会を設けたいと考えています。そして、自分の目で見たことや感じたこと、考えたことを活動に反映させ、そのことを大切にしながら活動をし、私たちの想いをこれから活動に参加していくメンバーや活動につなげていきたいです。  
(心理学部心理学科2年 岩永春香・国際学部国際学科2年 北原美奏)

## MG ☆ SUZU アートでキャッチボール

白金校舎からも程近い新橋に、福祉プラザさくら川という、特別養護老人ホーム新橋さくらの園、介護老人保健施設新橋ばらの園、知的障害者更生施設新橋はつつ太陽からなる比較的新しい複合型の施設がある。私たちは「アートでキャッチボール」をコンセプトに特養で活動を行ってきた。学生と利用者の方が一緒にアートを制作することによって利用者の方に楽しんでもらいたい、またアート制作や出来上がった作品を通して利用者の家族の方に喜んでもらいたい、そして私たち自身も楽しみながら交流していきたい、これが活動するにあたって大切にしていることだ。2009年度、MG ☆ SUZUの活動は大きく発展した。2008年度までは形となって残る「アート＝作品」という考えが強かったかもしれないが、2009年度は「アート＝気持ち」を大切にしてきた。アートには作り手の思いや考え、その時話した会話など、様々なものが込められている。この気持ちを大切に活動してきた1年間であった。

### <新メンバーの加入>

2009年4月から新メンバーが10名程活動に加わった。3月に卒業した先輩を見送った後、メンバーは3人となり、新しい考えが浮かばずに立ち止まってしまう事が多かったが、新メンバーの加入によって、3人で考えていた事も多くのメンバーで考える事ができ、MG ☆ SUZUに新しい風が吹いた。今までやってきたこと、現在の活動を伝えるため月1回ミーティングを行うことを決め、施設での活動後には30分のミーティングを行いメールリストでその日に来られないメンバーへの情報共有も行った。2008年度の反省でもある「情報共有」については徹底することができたように思える。また、今後の活動についてはミーティングでは伝えきれない事も多く6月には「SUZU ツアー」を行った。コミュニケーションで重要と考えられる「会話」を楽しみながら施設の周辺を散策し、施設内にある喫茶店でメンバー同士の交流と施設の職員の方との交流を行った。このような日ごろのミーティングやイベントを通して、新メンバーと旧メンバーがお互いのことを知り、少しずつ一緒に施設内で活動をしていくようになった。このような過程から生まれた作品である飛び出すカード、うちわ、花のマグネット、コースター等は、製作過程において利用者の方だけではなく、私たちも楽しむことができた。利用者の方と作った「アート」は、その時の思いが詰まった宝物である。



月1ミーティング バレットゾーンにて

### <アートでキャッチボール展示会>

2009年夏、私たちはこれまでに利用者の方と制作してきた作品を、何らかの形で利用者のご家族や地

域の方々など施設以外の方々にも伝えたいと思い、展示会を企画した。利用者の方に自分の作った作品を見て元気になってもらいたい、利用者の方の新たな一面や魅力を家族の方だけではなく、多くの方々に伝えたいという気持ちを胸に10月の展示会に向けて動き出した。約1ヶ月の展示期間で何をどう伝えるかを毎回のミーティングで話し合った。展示場所は悩んだ末に入り口前のスペースに決まり、利用者の方が普段も出入りする場所なので安全性についても話し合った。最終的に決まった展示方法は、利用者の方の作品を一つ一つ手作りの額縁に入れることだった。展示会終了後に利用者の方に感謝の気持ちを込めて贈りたいという考えになったからである。額縁に一つ一つ入れる事で、終了後も部屋に飾って楽しむ事ができる。また、家族の方に持って帰って頂いて展示会に来られなかった方にも見ていただけるのではないかと思います、この展示方法を決めた。展示会ではこのような私たちの思いは多くの方に伝わったように思える。「私の作品があった」、「飾ってくれて嬉しかった」等、利用者の方々の声を聞くことができた。また、「こんな活動やってたの〜」といった、施設の他のフロアの家族の方の驚きの声や、「私たちのフロアでもやってほしい」という嬉しい声も聞く事ができた。私たちの目的であった「アート」を通して、利用者の方にも家族の方にも笑顔になってもらう事ができたのではないかと思います。そして多くの方々に利用者の新たな魅力を伝える事が出来たのではないだろうか。

私たちは毎回の活動後にその日の感想を書いているのだが、その感想は、高齢者の方と接することの難しさや歯がゆさ、楽しい会話や感動して泣いてしまったエピソード等様々である。展示会終了後の活動で利用者の方から「ありがとう」と言っていたことや、今まで活動に参加していなかった利用者の方が楽しそうに作品を作って下さったときの姿など、その日の感想の紙をみるだけであの時の感動がよみがえってくる。活動を始めるまでは「私たちの方から」という気持ちが強かったと思う。しかし活動をしていると利用者の方から教わる事と一緒に発見する事の方が多かった。例えば、花のマグネットの制作活動では、利用者の方に合わせて、少し手間がかかるものと簡単にすぐできてしまうものの2パターンの花の形を考えた。ところが制作活動に入ると2パターンどころか何パターンも次々とアイデアが出てきた。材料は紙・マグネット・ボタンと至ってシンプルなものなのに、たくさん作っていただいてテーブルの上は個性豊かなお花畑のようだった。花に使う紙の色の組み合わせ方、花びらの巻き方、中には「こうした方がきれいよ」と葉の作り方を教えてくださる利用者の方もいた。当初、私たちは作品を完成させることに力を入れてしまっていたのかもしれない。しかし、利用者の方から「アート」は楽しむものだという事を教わった。

SUZUを立ち上げてから約2年経ったが、設立からのメンバーは卒業や就職活動等で今までのように活動していくことが難しくなってきた。これからは今年度加入してくれたメンバーたちによる「新生MG☆SUZU」が動き出す。活動における悩みや不安などはつきないと思うが、その度に皆で話し合い、解決し、何年後も何十年後も「アートでキャッチボール」を柱にMG☆SUZUが生まれ変わり、動き続けることを願ってやまない。

(社会学部社会福祉学科4年 永戸夏美 3年 依田ツカサ)



## MG natural

### 【はじめに】

『MG natural』は、明学生のためのボランティア情報誌である。私自身、様々なボランティア活動に参加し、多くの人と出会い、多くのことを学んだ。そんな体験を多くの人に伝えたいと思い、この情報誌を作り始めた。「ボランティアを“自然”なことにするために」、「ボランティア活動にかける思いを“ナチュラル”に伝えたい」、「学生に愛され、“自然”と手に取ってもらえるフリーペーパーを作りたい」という思いを込めて『MG natural』という誌名にした。ボランティアを広めること、人と人、他団体との繋がりをつくることをミッションとして活動している。

### 【活動報告】

2009年の活動は、『MG natural 第2号・第3号』の発刊であった。

『MG natural』は第1号から図書館に所蔵していただくことになった。とても嬉しかったとともに、これまで以上にいいものを作らなければならないと思った。この嬉しさをモチベーションに変えて、いいものを読者に発信していけるよう内容から編集にいたるまでこだわっていきたい。

#### ● MG natural 第2号

2009年7月に『MG natural 第2号』を発行した。何もかもがはじめてで手探り状態で仕上げた創刊号に比べて、企画の立案・原稿依頼・執筆・編集といった作業はスムーズに行うことができた。第2号は、内容はもちろんだが、特にレイアウトや色づかいなど「見せ方」にこだわった。ただ単に、伝えた



いことを書くだけではなく、どうしたら読者が読みやすくなるのかという点にこだわった。そのためには編集作業に時間をかける必要があった。皆の協力のおかげで、予定通りに原稿をもらうことができたので、編集作業にあてる時間に余裕が生まれた。よって時間をかけて編集や誌面の作成に没頭することができた。様々な資料を参考に、「どうしたら読者の読みやすいフリーペーパーを作ることができるか」ということを考え、試行錯誤した。そして自分が思い描いたようなフリー

ペーパーに仕上げることができた。多くの方から「よかったよ」という声をかけてもらうたびに、頑張ってたよかったと思った。そんな声が、次号を作る際のエネルギーとなっている。部数も200部から400部に増やすことができたので、より多くの方に読んでもらうことができたと思う。多くの方に読んでもらって恥ずかしくないものを今後も作ってきたい。

#### ● MG natural 第3号

2009年12月に『MG natural 第3号』を発行した。第3号を製作する際に一番悩んだことは、誌面に掲載する新企画の立案であった。第3号ともなると企画に代わり映えがなく、似たような内容だとどうしても読者に飽きられてしまう。かといって「ボランティアから多くの学びがある」、「ボランティアを通して人と人のつながりが生まれる」というメッセージは、このフリーペーパーを作る上では大切に

したい。しかし、これまでの企画・編集を皆の力を借りつつもほとんど1人でやってきた私には、新企画



画を考える余裕はなかった。そこで、夏に行われた白金ボランティア学生スタッフ研修会でスタッフの皆に、どんな企画があったら面白いのか、意見をもらう機会を得た。面白い企画を出してもらうことができ、第3号の企画につながった。その1つの例に「明学と地域」というテーマで、白金・横浜地域でボランティア活動をしている学生たちに、地域におけるボランティア活動の魅力を語ってもらった対談企画がある。みんなから、ボランティアをやっている学生たちが話をする

機会を作ることでより横の繋がりができ、『MG natural』のミッションに繋がるのではないかというアドバイスを受け、実現した企画だった。多くの学生に地域ボランティアの魅力を伝え、活動に興味を持ってもらいたいというのがねらいだった。しかし、新企画を載せる上でネックになったのは、ページの少なさだった。そこで、「せっかくいいフリーペーパーだし、もっと読みたいからページ数を増やしたらいいと思う」という夏合宿であがった意見の後押しも受けて、ページ数を8ページから12ページに増やした。しかし、これが予想以上に作業量を増やしてしまった。たった4ページ増えただけでこんなにも大変なものなのかと思うぐらい、なかなか編集作業が終わらなかった。しかし、多くの人の励ましと、協力を得て、何とか第3号が完成した。『MG natural』の作成に協力してくれた学生が、「こんな素敵なフリーペーパーに載ったことが嬉しくて周りの友達に配っちゃった」と言ってくれたことがとても嬉しかった。確かに、新しいことを始めることは大変かもしれないし、チャレンジする怖さもある。しかし、それを乗り越えてこそ見えてくるものはたくさんあるし、結果自分自身も成長することができた。今後も『MG natural』だけでなく、新しいことにどんどんチャレンジしていきたいと考えている。

#### 【今後の課題】

最大の課題は、「メンバーを増やすこと」である。今までは「In Design」というソフトを編集者1人しか持っていなかったため、編集に関しては作業が1人に集中していた。しかし、10月に白金ボランティアセンター学生スタッフのパソコンにソフトが入ったので、次号からは多くの学生が編集に参加することが可能になった。後輩にぜひ、今後も『MG natural』の製作を続けて欲しいし、『MG natural』の製作以外にも他の学生スタッフがチラシなどを製作する際に役立てると思うので、「In Design」の講習会を開催したいと考えている。また、末永く愛されるフリーペーパーを目指して、新しい企画を取り入れていくことが必要であると考えている。しかし、その際に重要なことは、“何を伝えたいのか”を念頭に置くことだ。私自身、レイアウトや写真の加工にこだわりがちになり、中身（文章）をなおざりにしてしまう場合があるが、それではいいものは作れない。『MG natural』が人と人の繋がりを作る架け橋となれるよう、自分たちの言葉で読者にボランティアの魅力を伝えていく工夫と努力が大切だと考えている。

※『MG natural』はボランティアセンターホームページからダウンロードできますので、ご覧ください。

(心理学部心理学科3年 須賀ゆきの)

## COS (Circle of Shirokanaise)

### 【団体説明】

人と人とのつながりの輪を大切にし、その輪を学内・地域に広げていきたいという思いを込め、「happy cycle, happy circle」をキーワードに、地域と学生がつながることのできる場を創っていきたいという思いで活動している（詳細は2008年度報告書32ページ参照）。

### 【活動内容】

#### 1. 大学周辺の地域清掃

誰でも簡単に始められるゴミ拾いという活動を通して、【ゆるく、たのしく、かっこよく】をコンセプトに、メンバー手作りの竹トンゴと、COSマークのついた揃いのエプロン、染物軍手、繰り返し使えるゴミ袋といった自然でエコな雰囲気のオリジナルスタイルで、楽しくおしゃべりをしながら大学周辺でゴミ拾いをしている。普段とは違った視点で地域を再発見することもある。様々な人に参加してもらいたいと思っているので、学期もしくは月によって活動日程を調整している。

#### 2. ペットボトルキャップの回収

白金校舎ボランティアセンター前に回収ボックスを置いている。集めたキャップは2009年10月からは港区リサイクル事業協同組合に回収していただき、同組合を通して全額がユニセフに送られ世界の特に困難な状況に置かれている子どもたちのために使われる。今年度は2009年10月に回収に来ていただいた。回収活動を始めた2007年1月から2010年10月現在までに集まったキャップは100,000個以上になる。

#### 3. COSblogの更新

日々の活動記録を更新しCOSの活動や雰囲気を発信している。（参照URL:<http://coscoscos.exblog.jp/>）

### 【2009年度の活動内容】

#### ・清掃活動

##### （1）定期清掃

春学期は週によって曜日を変えて幅広く参加者を募り、秋学期は火曜日に固定しコンスタントに参加者を募った。

##### （2）臨時清掃

定例の清掃日程とは別に、別日を設けて清掃活動を行った。11月に開催された白金祭（学園祭）では、学外周辺だけでなく学内も清掃しCOSのPRをした。またコスプレをしてCOSをする、というコンセプトで「COSプレ」企画も実行した。普段着よりも地域の人から声をかけられることが多く、目に留まるという点で特に意味のある活動になった。

#### ・ソニーマーケティング学生ボランティアファンド受賞

第7回に引き続き、第8回もソニーマーケティング学生ボランティアファンドから助成金をいただく

た。7月に参加した報告会では、全国から27団体・100人を越える学生が一堂に集まり、活動や活動への想い、悩みなど、熱い議論を通して交流を図ることができた。

#### ・白金ボランティアセンター学生スタッフ研修合宿への参加

COSの活動報告を行いグループワークも行った。COSのブランディング化についてディスカッションをしてもらい、腕章、缶バッジといった視覚媒体を利用する、COSの自然なイメージをいかした「捨てたくなくなるチラシ」の作成など、COS以外のメンバーからも様々な意見を聞くことができた。

#### ・外部の方とのコラボレーション活動

##### (1) 「大学生が考える！みなと区民まつりにリユース食器導入計画作戦会議」への参加

港区ではお祭りの際に大量の食器ゴミが出るために、再利用できるリユース食器の導入の方法や対策を考えると企画であり、来年以降のみなと区民まつりに導入することを目標としている。会議は10月から2月にかけて行われる予定である。慶応義塾大学、戸板女子短期大学でエコ系サークルに所属している学生も参加しており、他大学生とも関わることができた。

##### (2) 高輪地区総合支所主催クリーンキャンペーンへの参加

港区白金高輪にある高輪総合支所主催のクリーンキャンペーンに参加した。地域の方々や中高生と一緒に掃除をしながら、泉岳寺などの史跡を見て歩くという活動であった。また、同じくキャンペーンに参加していたみなとケーブルテレビの取材を受け、地域に向けたCOSのPRができた。

#### 【成果と課題】

今年度は学内だけでなく、白金校舎近隣に拠点のある団体や機関とのつながりができたことが大きな収穫であり、白金という地域により親しみを持てたと思う。清掃活動について、春学期は活動開始時期がやや遅かったが、ほぼ毎回新規参加者があり学生を巻き込むという点では成功したといえる。その反面、秋学期は新規参加者が少なかったため、清掃日程の見直し・より参加しやすい工夫をするともに活動の認知度を上げることが必要だと感じた。臨時清掃では定期清掃に参加できないメンバーや他プロジェクトのメンバーにも参加してもらうことができた。COSblogにおいては頻繁に更新することを心がけ、様々な参加者に書いてもらうことで、複眼的に地域や活動について振り返ることができたと思う。また、COSは定例ミーティングがないため定期清掃以外で全体が集まることは難しい。そこで他の学生への呼びかけとともにメンバー同士のコミュニケーションの場も作っていきたい。

#### 【今後の展望】

今後は普段の活動の他にもイベントを企画し、誰でも参加しやすい雰囲気を作り、学生を巻き込んでいきたい。外部の方々とのつながりは勿論、白金ボランティアセンターの他プロジェクトとの関係も大切に、積極的に関わっていくことでさらなる人と人とのつながりの輪を広げていきたいと思う。また、「ゆるく、たのしく、かっこよく」というCOSらしさを十二分にいかして活動していきたい。

(心理学部心理学科2年 本間由香)

## 明治学院大学ボランティアセンターリニューアル記念イベント 白金合コン

### 1. 「白金合コン」とは

白金合コンとは、地域の方々、白金学生スタッフ、ボランティアセンターをはじめとした本学教職員が交流を通してつながりの輪をひろげていくことを目的として行われている交流会である。今回で3回目の開催にあたる。

### 2. 第3回開催に至るまで

2009年9月の白金学生スタッフ研修合宿の際、同年夏に行われた白金ボランティアセンター拡張を記念するイベントを催す話し合いが行われた。合宿中に挙げられた「普段各々のプロジェクトの活動に専念していることによる学生スタッフ同士の横のつながりの希薄化」という問題点の改善と、「白金ボランティアセンターを通してご縁ができた地域の方々との交流の場を作りたい」という気持ちをもとに、白金合コンを開催することを決めた。

準備は参加者を把握する作業から始まった。ボランティアセンターに関わる多くの方に招待状を送り、出欠を伺った。当初はそれほど大きなイベントになるとは予想していなかったのだが、出席の声を聞く度に、事の大きさを認識した。最終的に合コン参加者は70名以上に及んだ。それと同時進行で、合コンの構成を考えた。合コンを通じてさらなる交流のきっかけを作りたい、その思いを込めて「地域」と「大学」をキーワードに、出席者全員が参加するグループワークを企画した。こうして、合コンは第一部で新しく生まれ変わったボランティアセンターのお披露目をし、第二部でグループワークを行い、第三部は交流の場を創るという3部構成に決まった。この中で準備に最も時間を割いたのが第3部であった。前回までの合コンを参考に、何かを食べながら楽しく話ができる機会にしたい、そしてその料理は学生が準備したいと考えていた。こうして何を作るか、材料はどうやって手に入れるか、そんなことを考えている最中にとっても素敵な「出会い」をすることになる。白金学生スタッフプロジェクトのMGパール(MGパールについては、本書22～23ページを参照)のイベントの打ち合わせのために、目黒区三田にあるフェアトレード商品を扱う第3世界ショップを訪問した際、形が悪い等の理由で市場に出回らない「もったいない野菜」の存在を知った。この野菜たちを使ってみてはどうかと思いついたところから、カレーを作ることに決定した。このカレーには「一つ一つの素材がカレーを良いものにするように、一人一人が地域を良いものにしていこう」という思いが込められている。また、素敵な出会いはそれだけにとどまらなかった。イベントの内容に共感したセカンドハーベスト・ジャパンを通して、カレーハウス CoCo 壱番屋のカレールーを寄付していただいたのだ。その他に「もったいない野菜」を使ったサラダ、白金志田町倶楽部(白金志田町倶楽部については、報告書20～21ページを参照)会員のお店から購入した美味しいパンも用意することができた。ご飯は本学食堂を運営している東京ケータリング株式会社より購入し、食器類の寄付や調理器具も貸し出していただいた。明治学院大学オリジナル商品である「MGウォーター」を購入し、明学らしさを出すことも意識した。

### 3. 合コン当日の様子

当日の準備は足りない食材の買い出しから始まった。職員の方の指示のもと、70人分のカレーを作っていた。カレーができた後は会場の設営作業が待っていた。白金学生スタッフはボランティアという舞台上で活躍する人の集まりであるゆえに、自主的にそれぞれが動くあまり、上手くまとまらないこともあったが、なんとか全ての準備が終了した。

こうして準備を終え、いよいよ合コンが始まった。新しく拡張したボランティアセンターでも入りきらないほどの人の中、本学学長、学生スタッフプロジェクトパートナーであるNPO法人ボルネオ保全トラストジャパン事務局長、白金近隣団体を代表して白金幼稚園教頭、白金学生スタッフチーフという「大学」、「地域」、「学生」の三者による記念のくす玉割りを行い、別会場へ移動した。第2部では、「地域と大学が親密になるには!？」というテーマに沿って、参加者全員による熱心なディスカッションが繰り広げられた。それぞれが自分の意見を発表し、相手の意見を聞き、それを踏まえてまた新たな意見を出す。世代も生活のフィールドも国籍も違うさまざまな人たちが、「地域」と「大学」というキーワードでつながる時間。地域と大学と学生との距離が近い関係であること、気軽に挨拶ができる関係であることの重要性など様々な意見が出て、短い時間であっても有意義で密な時間をすごすことができた。第3部も、それぞれ合コン活動に積極的に参加でき時間がとても短く感じられた。参加された方には「明学の方だけではなく、他団体の方とも話すことができ、有意義な時間を過ごすことができた。」というお言葉をいただくこともできた。学生スタッフ同士のつながりも準備から片づけを通して親密になっていったように感じる。初めて会うような仲間もいた中で、確実に距離は縮まり、目的を達成できたと思う。

### 4. 合コン後のつながり

合コンが終わってから、「この会を開いたままで終わりにしてはいけない」という声が上がリ、お礼状を送ることになった。制作は12月から始まり、フォトアルバムに、当日の写真（全体写真と個別の写真各1枚ずつ）と学生スタッフによる寄せ書きを書いて、参加していただいた全ての団体に感謝の印として送ることができた。フォトアルバムに写真を2枚しか入れなかったのには「これからもつながりを深め、アルバムの中を写真でいっぱいにしていきたい。」という思いがあったからである。

### 5. 全体を通して

企画をした私たち自身がイベントの運営に不慣れなこともあり、招待状の発送、カレーの具材の発注等様々なところでつまずきながら、手探りで準備を進めていった。担当者2名だけでは全てを成し遂げることは到底できず、学生スタッフの仲間はもちろんボランティアセンターの職員の方々に多くの迷惑をかけ、支えられ、地域の方々に協力していただいて何とか成功させることができた。そして、合コン当日だけではなく、準備からずっとボランティアセンターの地域との絆の強さを感じずにいらなかった。この合コンが、地域と大学のつながりを深めていくよりよい機会になってくれることを願いたい。

(心理学部心理学科2年 齊藤瞳、近藤恵利子)

## 研修会

### 【目的】

現在の白金ボランティアセンター学生スタッフ（以下、学生スタッフ）の活動は、プロジェクト別の活動が大部分を占めている。学生スタッフの多くが5つのプロジェクトのいずれかに所属し、活動フィールドは違えど学生同士や外部団体と学生をつなぐ「架け橋」となることを共通の目標として掲げ日々活動している。しかし、私たちは各プロジェクトの1員であるだけでなく、学生スタッフの1員でもある。つまり、学生スタッフのプロジェクトについて尋ねられた時、自分の参加しているプロジェクトはもちろんだが、参加していないプロジェクトについてもある程度把握し、説明できる必要がある。そこで、学期に1度行われる研修会では、各プロジェクトの活動についての情報共有することを目的としている。さらには、研修会の中で、各プロジェクトでの課題を学生スタッフ全体で共有し、問題解決の方法を皆で考える機会にもなっており、それが、次学期のプロジェクト活性化につながっている。したがって学期に1度の研修会は、学生スタッフにとって重要な場として位置づけられている。

### 【2009年度春学期研修会】

2009年9月17日から19日まで、国立オリンピック記念青少年総合センターにて行われ、12名の学生スタッフと白金ボランティアセンターのコーディネーターが参加した。そのほかにも、教員、学生スタッフOB、プロジェクトのメンバー、地域の方など、多くの人達が参加してくれた。研修会の内容は、学生スタッフたちとコーディネーターが事前に何度も打ち合わせをして企画された。

研修会1日目は、拡張工事が終わったばかりの白金ボランティアセンター（以下、ボラセン）に集合し、ボラセンの成り立ちや仕組み、ボラセンのチームとして活動する上での心構えについて、李コーディネーターが講義を行った。この講義を通して、学生スタッフの活動は、義務ではなく、自分のやりたいことを自分のペースで行うことができるが、チームでやっているからには責任があり、活動に責任が伴うからこそ結果や充実感につながるがあることを再確認できた。その後、白金校舎からほど近い白金台どんぐり児童遊園に移動し、特別講師としてお招きしたこまどり社・仮屋崎健氏（詳細は本書41ページ参照）による“ボランティア講座”を受講した。お話を聞いて、人それぞれボランティアに対する考え方は違うし、何がボランティアなのか定義づけることは難しいのではないかと思った。しかし、結果的に自分の行動が、人のためになっていたと思うことができるような活動ができたらいいなと感じた。途中、日ごろからお世話になっている白金地域の方も参加して下さり、学生スタッフのつながりの輪が広がっていることを、こんな一幕からも感じる事ができた。その後、仮屋崎氏、学生スタッフ、ボランティアセンタースタッフ、教員、地域の方と親睦会を行った。普段は活動を通しての関わりが多いのでどうしても固い話が多かったが、この親睦会で食事をとりながらざっくばらんにお話することができ、互いに新たな一面を発見することができた。2日目は、プロジェクト別に活動紹介・春学期の総括が行われ学生スタッフの中で情報共有を行った。その上で、プロジェクトが抱えている課題について、

プロジェクト別に用意したグループワークを通して、参加者全員で解決方法を考えた。問題を抱えてしまうと、思いつめてしまい物事を多角的に見ることができなくなってしまうがちになる。しかし、同じ学生スタッフの仲間が問題を客観的にみて様々な解決策や意見を言ってくれるので、とても参考になるし勉強になる。プロジェクトを進めていく上で似たような問題を自分自身も抱える可能性があるので、このように各プロジェクトの問題について考え議論することは学生スタッフ全員にとって非常に有意義な機会となっている。親身になって共に問題を考えてくる仲間がいることは心強いし、合宿だけに留まらず普段も相談し合える関係を作っていく心がけを持つことにもつながっている。3日目は、新しくなったボラセンで「何かしたい」と思い皆で「ボラセンリニューアル記念イベント」考えた。そこで企画したのが、「ボラセンカレンダー（詳細は本書36ページ参照）」の作成と「“白金合コン”（詳細は本書30～31ページ参照）」である。普段はプロジェクト別に活動しているが、学生スタッフ全員で何かできることをしたいという思いからこの企画を立案した。

#### 【研修会を振り返って】

研修会を通して、学生スタッフ同士が“本当の仲間”になれたと考える。普段、プロジェクト別に活動することが多く、学部学年そして在籍校地が異なる学生スタッフ全員が集まる機会を作ることは難しい。研修会はそのような学生スタッフ達が一堂に会し、親交を深める良い機会となっている。お互いメーリングリスト上では知っているだけだったのが、直接顔を合わせることで、初日の「はじめまして」という関係が、2泊3日が終わる頃には学年関係なく議論できる関係になっている。それだけ濃密な時間を私たちは研修会を通して共有していると言えるだろう。楽しい時間も辛い時間も共有できる、そんな“仲間”を作るこのような機会を今後も大事にしていきたい。

また、研修会は私たちの成長にもつながっている。正直研修会の準備は大変だ。例えば、2日目の発表ではプロジェクトごとに60分という時間が与えられる。自分たちのプロジェクトの活性化や問題解決につながるヒントを得るために、どのように時間を上手く使えばいいのかを考えたり、わかりやすく正確に活動内容が伝わるプレゼンや配布資料を作るなど、大変な部分も多くある。しかしそれを乗り越えることが自分の成長につながり、さらには自信につながっている。

今回の研修会は、秋学期に向けた学生スタッフ1人1人のモチベーションを高めることができたと思う。研修会に参加した学生からも、他の学生スタッフからの刺激を受けて活動への意欲やモチベーションを上げることができたとの感想があげられた。1人1人が学生スタッフとしての自覚と責任を持ち、秋学期の活動を盛り上げていく素地を作ることができたのではないかと思う。年度末となる2月にも秋学期研修会を行う予定である。今後も研修会が、学生スタッフ自身の成長やプロジェクトの活性化につながる機会となるよう企画運営していこうと思う。私たち学生スタッフ同士の距離を縮め、学生同士が切磋琢磨し合えるこの機会を大切にしていきたい。

(心理学部心理学科3年 須賀ゆきの)



## あなたにとって地域とは何ですか！？

私は、横浜校舎近隣の小田急分譲地で地域活動を始めたことを機会に、「地域」とは何だろうと意識するようになり、「地域とは居場所」ではないかと思うようになった。小田急分譲地をより暮らしやすくしようという思いや、自分たちの地域は自分たちで守るという意識を持っている地域の皆さんの姿を見て、地域とは自分たちで創り上げていく「居場所」だと思えるようになった。

他の学生スタッフも日頃の活動で地域に何らかの形で関わっているので、皆どのように思っているのか知りたくなり、2009年度の白金校舎学生スタッフ研修合宿（詳細は本書32～33ページ参照）で、「あなたにとって地域とは何ですか？」というテーマでグループワークを実施した。

まずは参加者全員に思いつぐまま、地域とは何かを書きだしてもらった。地域とは涙がながせる場所、安心出来る場所、そして、自分の原点に戻れる場所などと参加したスタッフの数だけ様々な意見が寄せられた。とても嬉しい気持ちになったと同時に、グループワークは時間が足りずに意見を集めるだけで終わってしまったため、集まって意見を皆で共有したいと思った。そんな時、皆からもらった貴重な意見を活かす機会を、2回も得ることが出来た。

1回目は白金校舎ボランティアセンターのリニューアルイベントのひとつである、リレートークイベント（詳細は本書43～45ページ参照）で発表する機会を得た。寄せられた意見の中で最も印象的だった意見を出してくれた学生スタッフ2年北原美奏さん、藤巻杏子さんから更に具体的に話を聞き、当日の発表で自分の意見と比較しながら紹介した。藤巻さんにとって「地域とは居場所」、そして北原さんにとって「地域とは誇り」であった。私と同じ意見であった藤巻さんはシロカネ・ストリート・フェスタ（現在の名称はシロカネ・グローバル・フェスタ）をきっかけに地域活動に参加し、志田町倶楽部学生チームの一員に至るまでの経験を積み重ね地域とは居場所という意識が根付いたようだ。北原さんが「地域とは誇り」と思うようになったきっかけはボランティア特別研究の授業の一環（GO WEST）として郡上八幡に行き、「昔ながらの雰囲気を変えたくないから、何よりも街並みを大切にしたい」という地元の方の声や、伝統芸能のひとつである郡上おどりへの熱い思いを持つ高校生の話を聞いたことだった。

2回目は、MG natural 第3号（詳細は本書26～27ページを参照）の対談企画「あなたにとって「地域」とはどんな場所ですか？」にあったかサークルひまわりのメンバーとして、参加する機会を得たことだった。この対談は「地域活動には人の温もりを感じられる安心感という魅力がある」、「日頃の活動で日々の活動の積み重ねの成果を感じる」、「ひとつひとつの積み重ねで大きなことが出来あがっていくことを学んだ」ということを志田町倶楽部学生チームと共有し合えた良い機会となった。

2回も「地域」をテーマに学生スタッフと語り合うことにより、共有財産がまたひとつ増えたと思う。今後も活動に参加するだけでなく、皆で共有する時間を作り、財産を増やして欲しい。

（文学部英文学科4年 吉水萌）

## 人と人を繋げるたこ焼きの力

2009年5月15・16日に開催された「地域と地球を考えるシロカネ・グローバル・フェスタ2009」に明治学院大学白金ボランティアセンターの学生スタッフが初めてブースを出店する運びとなり、「Piece of 明学」というテントで「パールビーズの森プロジェクト MG パール」（詳細は本書22～23ページを参照）、「学生団体 ぼけっと」とたこ焼き販売の運営を行った。

フェスタ当日に先立ち白金校舎内の和室でたこ焼きの試作会を開いた。販売するたこ焼きの味を確かめる意図ももちろんあるのだが、実際に必要となる材料や道具、行程を確認し、調理自体に慣れることを目的とした会であった。この時点では手探りの作業が多く段取り良く進めることができなかったが、参加者同士知恵を出し合うことで、当日に向けた作業のコツをつかむことができた。

フェスタ当日は、試作会を行った環境とは異なるテントで調理することでテント内の整備に時間がかかってしまったり、多くの来場者・関係者がいるフェスタ全体の雰囲気にも飲まれてしまいスタッフらが混乱気味だったことが重なり、調理とお客様への対応をスムーズに進行できず、運営が上手くいくのか不安が増してしまった。その不安もフェスタが進んでいくうちに吹き飛んでいった。その要因となったのが「人と人の繋がり」である。フェスタ開始時の不安な状態では、一人きりでブースを切り盛りしなければならないのかと重荷に感じていたのだが、共にたこ焼き調理を進めてくれたスタッフの皆、団体の目的は違えど共にブースを盛り上げることで、相互に良い効果をもたらした「MG パール」・「ぼけっと」の方々、そして率先してたこ焼き調理を指導して下さった地域の方など様々な団体・立場の方々と共にフェスタに参加することで人と人との繋がりを改めて深く感じることができ、その繋がりを通じて一緒に何かを作り出す喜びを発見することができた。

この「人と人の繋がり」を再確認させてくれたのは間違いなく皆で一生懸命調理した「たこ焼き」である。今回、多くの人々とたこ焼きを調理する経験を経たからこそ、「人と人の繋がり」を感じる事ができたのであり、その重要性を気づかせてくれたたこ焼きの持つ力は偉大なものであったと感じている。様々な人を優しく包み繋げるような丸い形をしたたこ焼きは、私の人生において非常に大きな存在になったのではないかと思う。たこ焼き販売の売上金は、フェスタの運営元であり、日頃からお世話になっている「白金志田町倶楽部」を通してブルキナファソチャリティ事業に寄付させて頂いた。

最後に今回の活動の反省点を挙げる。この「Piece of 明学」ブースの企画がスタートした段階では誰が参加するのか、参加者はどの程度の作業まで担当できるのかが判然としておらず、加えて決定事項等の連絡方法が整備されていなかったため当日まで定まっていなかった内容が多かった。それらが明確になっているかで作業のやり易さに差が出てくると思うので何らかの改善方法を取るべきであると考えられる。しかし別の観点から見ると、参加者の線引きが曖昧だったおかげで飛び込みの参加者が増え、その方々のフットワークの軽さに助けられた面もあった。参加者の線引きを強くし過ぎるのは、決して得策ではないとも考えられる。

(心理学部心理学科2年 塚越浩平)

## ボラセンカレンダー

2009年10月より、白金校舎ボランティアセンター前の掲示板に「ボラセンカレンダー」が設置されました。ボラセンカレンダーとは、その名のとおりに白金学生スタッフが各々の所属するプロジェクトの毎月の予定を書きこむカレンダーのことです。夏の合宿でボラセンリニューアル記念企画のひとつとして提案され、実現しました。

このカレンダーは主に3つの目的のもと作成しています。

まず1つめの目的は「学生スタッフが各プロジェクトの現状を把握する」ということです。通常学生スタッフは自分の所属しているプロジェクトの活動に専念していて、他チームがどのような活動を行っているのか知る機会があまりありません。しかし私たちは全てのプロジェクトの総括を行っているボラセンに籍を置く学生スタッフとして、他チームの活動にも目を向けある程度現状を把握していたいという思いがありました。また他のプロジェクトの活動が見えることでお互いに刺激が得られ、関心を持つことでスタッフ同士の会話も充実し、他チームの活動への参加やプロジェクトのコラボレーションにつながるだろうという希望が込められています。

2つめの目的は「学内外の人たちへ活動をアピールする」ということです。学生スタッフ同士の共有にとどまらず、学生、教職員のみなさんやボラセンに足を運んで下さる地域・企業の方々などにも私たちが毎月様々な活動をしているということを是非見ていただきたいと思っています。たくさんの方々に目にとめていただけるよう、ボラセン前の掲示板に掲示することに決めました。

3つめの目的は「活動記録・アルバムとしての機能をもたせる」ということです。ボラセンカレンダーには、普通のカレンダーと同じように予定を書く欄と絵（写真）の部分がありますが、月初めにこれを目にした人は「おやっ」と思われるかも知れません。絵の部分は月初めは真っ白な状態なのです。そこにその月の活動で撮った写真をどんどん貼っていき、ひと月かけてカレンダーが完成します。活動先の人たちと笑顔で撮った写真や、緊張した面持ちでプレゼンをしている写真など、大切な一瞬をこのスペースにまとめ活動記録として保存することにしました。ビジュアル的な要素が加わり文字だけではわからない情報が伝わることで、前述した2つの目的もより強化されることと思います。

夢が詰まったボラセンカレンダーですが、4カ月掲示してみて改善点も見えてきました。一番重要なアルバムとしての機能が十分に果たせていないことです。写真の掲示は各プロジェクトに任せていますが、なかなか手が回らずアルバム欄に余白が目立ちます。やはりこの欄は写真で埋め尽くしたい！ということで、ボラセンカレンダー担当者がある程度一括して行うことにしようかと検討中です。主に、ボラセンホームページの活動ニュースに掲載している写真を掲示し、補足的に他のメンバーに追加してもらおうつもりです。

これからも、ボラセンカレンダーをますます充実させていきます。ボラセン前を横切る際には目を留めていただけたら幸いです。

(心理学部心理学科1年 櫻井仁美)

## 卒業学年報告 ～岡野晴貴の場合～

僕がボラセンに出入りするようになったのは4年生になって間もないころだった。就職活動もひと段落し、新しく何かをはじめよう、と考えて思い立ったのがボランティアだった。そんな1年足らずの短い期間ではあるが、その中で自身の経験やそれに基づく感想を報告する。

### ●白金志田町倶楽部での活動（志田町倶楽部については本書20～21ページを参照）

ボラセンに関わるようになってから初めて参加した活動は、白金志田町倶楽部の主催する「シロカネ・グローバル・フェスタ2009」の運営のボランティアだった。自分の大学の周辺地域について知りたいというのが主な動機であった。この活動を通して、明学生がこの白金という地に根付けていないことを知り、どうすれば明治学院と地域が密になれるのかが自分の中で課題になった。それを考えるために、志田町倶楽部が主催しているジャズライブのお手伝いや定期的に行われる防犯パトロールに参加して、白金に住む人々の声を聞いた。どなたも非常に良くしてくれて、どんな問いにも親切に答えてくれた。そのような環境で活動を続けられたことをとても誇りに思うし、ぜひ多くの学生に携わってほしい。

### ●MG パールでの活動（MG パールについては本書22～23ページを参照）

2009年12月に開催された「ジャングルクリスマスフェスタ in 白金 2009」。このイベントの企画や運営からMG パールの活動に参加し始めた。協働でプロジェクトを行っているNPO法人ボルネオ保全トラストジャパン(BCT)の方々と交流することで、環境問題以外にもNPOというものを知る良いきっかけになった。またMG パールは横浜・白金の両校舎で活動を行っているために情報共有が難しいという問題があったため、団体をまとめることの難しさも学ぶことができ、非常に良い経験となった。

### ●回想

僕は4年生ながら、ボラセンのスタッフとしては新米だったため、後輩から教えてもらうことが多くあった。しかし、目上の人との付き合い方など、僕が後輩達に伝えられたこともあったと思う。4年生の発言の重みは実感していたし、その上で最上級生として言えることは言ってきたつもりである。

また僕は、体育会のある団体で会計担当をやっていたこともあってか、ものを考える視点が他のスタッフの人たちとはだいぶ違ってたと自覚している。僕のしていた仕事は最終的には数値で表れてしまうものだったため、自分の仕事に対する自己評価は無く、他者からの評価がすべてだった。そういった仕事をしてきたために、妙に客観性があった。そのような自分の視点で団体行動のあり方などを自分なりに考えて何か力になりたい。常にそういった思いを抱きながら、僕は普段から活動に参加していた。このことが自分の周りの人たちに良い影響を与えてくれたら、非常にうれしく思う。

最後に、僕はボランティアセンターで活動できたことで明治学院を自分の心のよりどころとして強く実感することができた。今後も機会があれば明治学院とともに活動したい、と思えるようになった。社会に出てからも、ボラセンで活動できたことに対する誇りを忘れずに生活していきたいと思う。

（経済学部経済学科4年 岡野晴貴）

## Change!! ～ボランティアに対する私の意識～

ボランティアと出会ったのは、高校生の夏休みだった。当時消極的だった私に何かさせようと母親が勧めてくれ、老人ホームで行う傾聴ボランティアに最初の一步を踏み出してみた。しかし、緊張してばかりいて何をしたいのか分からず、ボランティアとして満足に関わることが出来なかった。とても悔しかった。私だって本当は出来るのだ、認めて欲しい、そんな一心で大学でもボランティアを続けることを決意した。活動をする明確な目的や計画は全くなかったが、とにかく進んでみることにした。

大学に入学し、障害者余暇支援や大使館、清掃、通訳などのボランティアを経験させてもらった。ボランティアを始めた当初、「誰かのために何かをする」という自分自身のイメージがあったが、それだけではなくボランティア同士の関わりで得る物も大きいと実感した。そして、少しずつではあるが、こんなボランティアをしてみたいという目的意識が生まれ始めたのもこの頃ではないかと思う。英文学科ということもあり、英語を使うボランティアをしてみたいと思い、自らホームページを検索し参加してみた。「英語を使う」という目的を持って活動に参加することによって、積極的にボランティアのメンバーに分からない点を質問し、こうした方が活動しやすいのではないかと徐々に意見を出すようになった。そして通訳ガイドの活動に参加した際、運営している方と話す機会があり、自分も大学でボランティアの企画運営に携わってみたい、何か身の回りで出来ることはないかと探し始めたのが2年生の後半からだった。

そうして企画運営が出来るものはないかと探していた時に、横浜校舎近隣の小田急分譲地にて地域活動を行う「小田急プロジェクト」(現在の名称：あったかサークルひまわり)に出会った。小田急自治会と明学生がコラボレーションし、交流を深めていくという内容だった。ボランティアに参加するだけではなく、自ら企画運営することも出来ると聞き、私の求めているものだと思い応募した。地域活動は初めてではあったが、携わらせて頂いている小田急分譲地の皆さんの人柄に魅力を感じ、活動が少しずつ生活の一部となっていった。それと同時に、ボランティアに対する意識がまた変化した。それまでは「ボランティアは誰かのために何かをする」と漠然としていたが、「小田急分譲地の皆さんのために日頃の感謝を込めて歌を贈りたい」と具体的になってきた。これをきっかけに、他のボランティアに携わる時も具体的に誰のために自分は何をしたいのか、また何が出来るのかを頭に置いて参加している。

4年間という長いようで短い期間で私は、「誰かのために何かをしたいという漠然とした意識」から「小田急分譲地の皆さんのために、感謝の気持ちを込めた企画をしたいという具体的な意識」に変化し、ボランティアに参加している。このように実感できたのは、ボランティアセンターの職員の皆さん、学生スタッフの仲間、友人や家族が居たからこそだと思う。皆さん、ありがとうございました！！

(文学部英文学科4年 吉水萌)

## 4年間のキャッチボール

3年生からMG☆SUZU（本書24～25ページ参照）のメンバーとして活動をしだして、私の4年間は「キャッチボール」だったのではないかなと思う。大学に入るきっかけとなったボランティアセンターで4年間活動を続けることができてよかったと思う。

私は「ボランティアの楽しさを伝えたい」その気持ちを胸に学生スタッフに登録した。スタッフになってチーフを務め、チームを統括していくことの難しさ、ボランティアの楽しさを伝えるって何なのだろうと悩む日も多くあった。

1年生の頃に先輩に「自分が楽しくなくちゃ、周りになんて伝えられないよ。」と言われたその言葉が今でもとても印象的である。自分自身が楽しいと感じる事を伝える。

私にとって楽しいと思えるボランティアは人との「会話」であった。ボランティア先の職員の方との会話、利用者の方との会話、そして一緒に頑張っている仲間との会話が何よりも楽しかった。MG☆SUZUは利用者の方と楽しみたいという気持ちが強いメンバーが多くいて、とても刺激的であった。学年・学科は異なっても目指すところが一緒の仲間はお互いに刺激し合えてとても楽しい。私はこの4年間でボランティアが「普通」ということが伝えられたら良いと思っていた。もし隣に自分とは違う障害を持っている人が困っていたら、どうするだろうか。困っているのだから手伝う、それが「普通」だと思う。障害とか高齢者だとかそんなことは関係ないということを改めて学ぶことができた。隣にいる人は自分じゃないのだから、違って当たり前。うまく言えないけれど、ボランティアってそういうことじゃないのかなと思う。4年間楽しさを伝えることはできなかったかもしれない。けれど、いろんな人と会話をしてきた。そこから何か伝わったら良いと思っている。



MG☆SUZU ツアー施設前にて



MG☆SUZU 集合写真（いっちーが居ない！）

最後になりましたが、私に色々な事を学ばせてくれたボランティアセンターの職員の方々、先輩の方々、私と関わってくれた大切な仲間みんな、そして現場の皆さん、本当にありがとうございました。感謝の気持ちでいっぱいです。

（社会学部社会福祉学科4年 永戸夏美）

## ボランティアセンター学生スタッフとして過ごした時間

「人は人によって磨かれる」、これは高校生のときに部活の野球のコーチから頂いた言葉である。そして今でも私の好きな言葉の一つである。ボランティアセンターでの活動では、たくさんの人達とのかかわりの中で、私はこの言葉の通りに磨かれた（成長した）と思っている。私を磨いてくれた、たくさんの人に感謝の思いを持って自身の4年間を振り返りたいと思う。

自分自身が何をしたいのか分からずに先輩についていった1年生、頭でっかちなばかりで活動することが出来なかった。学生スタッフの可能性を探そうと奔走した2年生、チーフにもなり、新たな仲間と明学の学生スタッフの形を模索し、語り合った。活動の土台をつくり、仲間（学生×大学×地域×外部団体）と同じ“夢”に向かって協働し始めた3年生、“一連托生”という活動スタイルでとても大変だったが日々活発になっていく学生スタッフを実感した。思うように活動に参加できない自分に悔しい思いをした4年生、後輩の活躍に学生スタッフのさらなる可能性を信じる事が出来た。他大や外部の活動に参加するようになってから、「学生スタッフって何をやるの？」や「必要あるの？」と尋ねられることがあった。2年生の最初の頃は学生スタッフへの理解が個々人で異なり、学生スタッフの組織としての活動の方向性が不明瞭だったので、質問を受けるたびに説明が曖昧になったり、言葉に詰まったりして自信を持って伝えることが出来ずに悔しい思いをした。今振り返るとその悔しさが自分を「学生スタッフとして何か行動しなければ」という思いに駆り立ててくれたと思う。そして、2年生から3年生の活動の発展の中で、明学生だからこそ出来る活動を作りだし、行うことで明治学院大学ボランティアセンター学生スタッフとしてのアイデンティティを形成し、自分の言葉で伝えることができるようになった。

多様な人との関係性の中で活動をする学生スタッフとして大切にしてきたことは、“素直さ・がむしゃら”という姿勢、自分自身を“マネジメント”すること、“仲間への感謝の気持ち”の3点を意識し成長することであった。どれも目指すところまでは程遠かった。もう一つの反省として、想いのバトンを渡せたと実感することが出来なかったことである。たくさん素敵な先輩からもらったバトンに自分なりの色を付けて満足の出来る形で、後輩に渡したかったが、それがとても難しかった。これらの反省を生かし、次の舞台で更なる成長を遂げたいと思う。

最後に、2年生の時よりお世話になった林試の森クリニックの皆様、白金で活躍する場をくださった白金志田町倶楽部の方々、ボランティアセンター職員の皆様、そして良き師であり、戦友でもある李さん、その他にも私を磨いてくださった皆様、本当にありがとうございました。まだまだ荒削りな自分ではありますが、4月からは社会人となり、学生スタッフの活動を通して築いてきた皆様との人の輪や考え方を活かし、仕事やそれ以外の場面で係わるであろうたくさんの方の希望を組織し、ゆるく・たのしく実現できるような人間になりたいと考えています。

まだ狭く、何もなかったボラセンで遅くまで先輩・後輩や李さんと語った“学生スタッフの夢”の話でわくわくしたことは大切な思い出です。

(心理学部心理学科4年 山田純平)